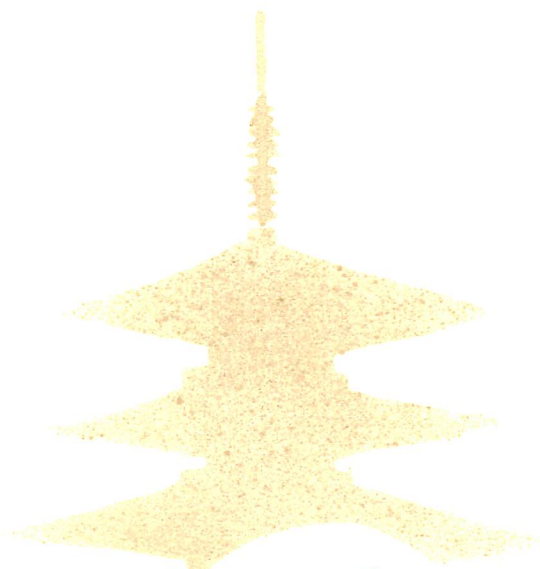


みめじみの

第19部



みめじみの

第19部



大谷光道著

目次

科学と宗教	2
講師紹介	2
自己紹介を兼ねて	4
それぞれの役割	9
ロボットの将来	13
宗教のイメージと 科学との関連	17
まとめ	21
読者の頁	29
あとがき	31

科学と宗教

講師紹介

司会

大阪大学大学院教授
イメージ情報科学研究所所長

井口征士氏

本日は大谷光道氏を講師にお迎えして、「科学と宗教」というテーマでお話を伺うことになっております。

大谷さんは、お手許の略歴にもありますように、大阪大学基礎工学部制御工学科の昭和四十三年三月のご卒業で、私が助手になってはじめての卒業生というご縁になります。

いろいろなところでご法話・ご講演をされた内容が『みめぐみの』という

冊子になって、もう十数冊、二十冊近くになります。それをいただいて読んでいるうちに、やはり宗教のことを考えることは大事なことなんだなと、思うことがしばしばありました。これは是非一度大学院の学生に聞かせたいと思いつながら実現することができず、たまたま今回、イメージ情報科学研究所主催の講演会がありましたので、是非こういう場面でもお願いしたところ、快く引き受けていただきました。

大谷さんは、学生時代から年の差を越えてというか逆転して、日ごろから非常に何か奇妙な考え方・物腰で、私も教えられることがたいへん多かったもんですから、こういう機会にお話を伺うことができ、本当によかったなと思っております。

それでは、大谷さん、一つよろしくお願いいたします（拍手）。

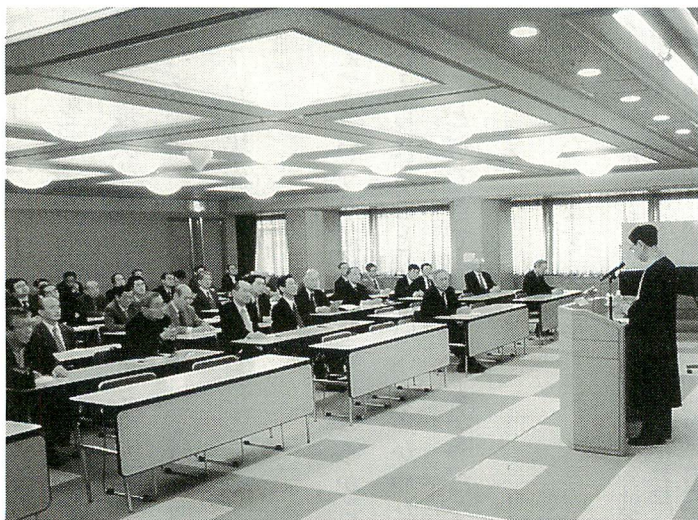
編集部註・財団法人イメージ情報科学研究所はイメージ情報（視覚、聴覚、感覚、感性など）を科学的にとらえ、コンピュータによって処理し表現する研究を、産学共同で行う団体。当日は大学教授、一般企業の技術担当重役や研究開発チーフといった、日ごろ科学技術に携わる方々が多く出席された。

自己紹介を兼ねて

ただ今は過分のご紹介を賜り、恐縮しています。

皆様方、日ごろから科学技術の発展のためにお力尽くのこと、心から敬意を表すところです。

井口先生からお声がかかったとき、宗教に携わっております私が、わけでも科学を含むテーマでお話をさせていただけるということで、母校や私の卒論を看てくださった井口先生、ご恩を受けた先生方にいささかなり



イメージ情報科学研究所での講演（3月27日、大阪）

ともご恩返しができたらと、今日まで、大学で習ったことを——と言えるほど優等生だったわけではありませんが——ほとんど役立たせることができなかっただけに、たいへんうれしく有難く思ったことでした。

今日のように、科学とか科学技術を専門にされてる方々にお話しさせていただくのははじめてのことで、たいへん緊張しております。

今日は、最初に自己紹介を兼ねて、私自身の中で科学と宗教の関係をどのように整理したかということ、次に、科学と宗教の役割について、それから我が国での一般的な宗教に対するイメージと科学の関連についてお話をしたいな、と考えます。

前もってのご案内やただ今のご紹介の中にも、私の略歴の中に大阪大学基礎工学部というのがあって、私のこの格好をご覧になって「いったいどこが基礎工学部なんや。」とお思いいになったんではないでしょうか。宗門校であるとか、或いは文科系の大学を出て修行でもしてというのが、常識的な通り

道かも知れませんが。

一言に言ってしまうえば、「子供の頃から好きだったのでそのまま理科系に行っただと。それで科学者の卵のままミイラになってしもたんや。」(笑)と、それだけのことです。

しかしそうは言っても、子供の頃、幼いながらにですね、「科学と宗教はぶつかるんじゃないか。」と、これでもこの小さい胸を痛めた(笑)ものです。今は苔が生えてますがね(笑)。

小学校の五年生(十歳)の夏に父から得度を受けました。後にも先にもツルツル頭になったのはこのときだけです。その後、富山県の井波というところの寺の住職になることが決まって、六年生の春、顔つなぎに両親に連れられて現地へ行きました。町を挙げての提灯行列ちようちんをはじめたいへんな歓迎を受けたことを覚えています。

退職されたばかりの小学校の校長先生だった方が、寺の中の説明などを

兼ねて私の話し相手になってくださっていて、模型飛行機を作って遊んでいた私を見て、「宗教と科学を両立されるんですね。」とおっしゃったのが思い出されます。

それが子供ながらにたいへん耳触みみざわりがよかったです。というのは、

「『宗教専門』と決めてしまわなくてもいいんだ、まだずるずるこのままいてもいいんだ。」というような気がしたからです。

しかし科学と宗教は矛盾するんじゃないかという課題を、いずれ



得度を終えて家族と

は何とか整理をせんならんなど思いながら、それぞれについての素養があるわけでもなく、そのまま時ばかり経ってしまいました。

あるとき何かの本に、「科学と宗教は互いに矛盾しない。両方とも人間が必要としているという点で共通してるんだ。」と書いてあるのを見て、それではやきつとした、そのときの爽快感は何ともいえないものでした。

さらに、これと同じことなんです、人間が科学と宗教に挟まれている、人間を介して両者があるという図式（科学 \uparrow 人間 \uparrow 宗教）を考えればいいんだと思うようになりました。

自分自身の中で両者が衝突してはたいへんです。自分の中でガリレオの裁判が起こって、原告と被告の両方を兼ねなければならんような悲惨なことになるという心配が、この本のお蔭で解決したのです。

ガリレオ \uparrow ギリシア以来の有限な宇宙観やキリスト教神学と結びついて長く支持されてきた天動説に対し、望遠鏡による天体観測で、木星の四つの衛星、太陽の黒点、金星の満ち欠けなどを発見し、地動説を支持して宗教裁判にかかり、地動説の放棄を命ぜられた。Galileo Galilei(1564-1642) イタリアの物理学者・天文学者(「大辞林」より)。

それぞれの役割

前置きはこの程度にして、それぞれの役割ということを考えてみたいと思います。

科学というのは客観的な世界を扱うもので、宗教というのは主観的な世界を扱うものであると言えるでしょう。

仏教における「仏」というのは「覚った人」という意味で、造物主ぞうぶつしゅであったり、あるいは全知全能ぜんちぜんのうであったりする神とは全く違います。このことは言い換えると、「仏の力は私に働く」ということです。私というのも、カギカツコワタシ——「私」——とでも言いましょうか、私そのもの、私から見た私、主体的にとらえた私、とでも言いましょうか、そういう「私」に働くものであって、仏さまの力が自然界、目に見える世界に力を及ぼすということはないということです。

ところが、造物主であるとか支配神であるとか、そういう神様であると自然界にも力を及ぼしたり、人を物質的にも幸せにしたり不幸にしたり、そのほかあらゆることをされるのですが、仏教についてはそういうことはないので、科学と宗教の違いを一層理解しやすいものになっているのではないかと考えられます。

ですからこう考えてくると、両者の棲み分け^すというのが初めからあったと言えるんじゃないでしょうか。簡単に言うくと、「科学は生活を豊かにするものである。宗教は心を豊かにするものである。」ということになります。科学については皆様方日ごろから親しく接しておられるので、私など「卵のミイラ」がとやかくご説明すべきものではないので、宗教の役割というのを中心に考えていきます。

宗教の役割は、「私をどうすればいいのか」という課題の答えを出すことで、「私を私にさせているものは何なのか」ということを追及して——皆様

方それぞれが「私」をお持ちになっているわけですが、「私」の存立基盤を突き止めて——私自身を納得させるものに出合わせる、言い換えれば救うとか、覚りを開かせるのが宗教の役割であると言えるでしょう。

そういう「私」を追及していく作業の中で、煩惱という厄介者に必ず出くわすこととなります。煩惱とはその字の通り「煩わづらわせ悩ませる」ということで、私たちの自己中心的なもの考え方——これは誰でもあるはずですが——から物事に対する執



京都洛西ロータリークラブでの講演（5月16日、京都）

着が出てきて、そこから自分の心を、或いは体を、煩わせて悩ませるもの、そして「私」というこの自我を膨ふくらせようと作用、大きくしようと作用を持つていると考えられます。

煩惱の反対が覚りですが、仏教は覚りを目標にする教えです。それで宗旨によって、この煩惱から離れる修行をしたり、或いは離れないまま何とか覚れないだろうかという違いはありますが、したがって教え（覚る方法）と行（修行）に違いがありますが、いずれも覚りを目標とすることに相違はありません。

ですから煩惱というのが覚りにいたるための大切な契機であるとも考えられるわけです。覚りというのは、言葉で仲々説明できませんが——私が覚っていないからですがね——「心の完全に自由な境地」とでも言いましょうか、煩惱をコントロールできる状態。煩惱にコントロールされるんじゃないで、逆にコントロールできる状態ともいえるでしょう。

※筆者註…当日はここで「煩惱」のお話を詳しくしましたが、紙面の都合上割愛します（『みめぐみの』第十六部参照）。

ロボットの将来

煩惱の話が出ましたので、科学に携わる方々に身近な例があります。

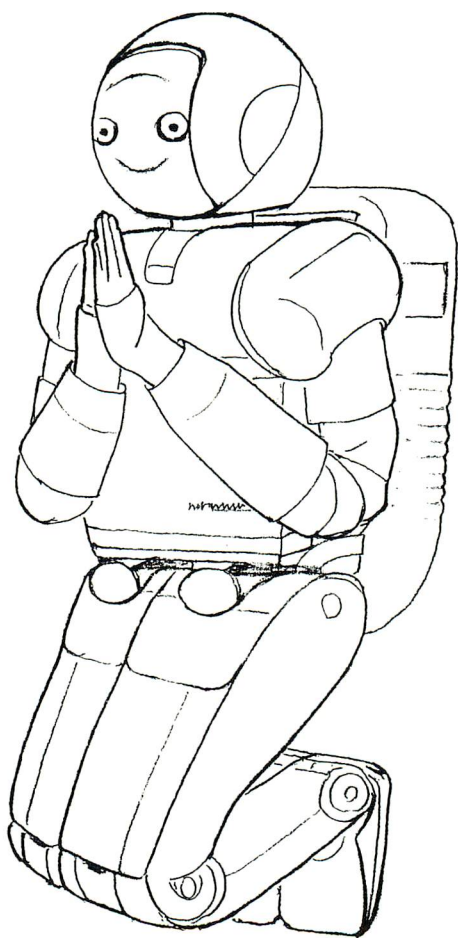
この中にもロボットに関係のあるお仕事をされている方がおられると思いますが、四月七日でしたか、鉄腕アトム誕生日だといってそのイベントが報じられていましたね。アトムのように進んだロボットは、現在ではまだSF（空想科学小説）の世界に属していますが、これからはだんだんSFではなくなっていくのではないのでしょうか。

今ここでお話ししたいのは、早くから使われている工業用のロボットなどではなく、最近目に触れ出した二足歩行型の、さらにもっと進んだ、これから登場してくるアトムのような自律型ロボットです。

臭^{にお}いや味まで機械で測定できるようになってきて、私たちの五感（見る、聞く、臭う、味わう、触れる）すべてを機械で置き換えられるようになってきたようですから、いずれは人間の持つている意識やさらに自我までロボットに持たせることが可能になってくると思います。「ロボットに心を持たせることはできない」との説もありますが、人類の科学というのは不可能を全部可能にしてきた歴史があるので、アトムのような自律型ロボットはやがて可能になると、私は思っています。

大学時代、パターン認識（文字を読む機械）の原理を習いましたが、そのころはまだ実用にはほど遠く、「夢のまた夢」という状態でした。しかし今は完全に実用化しており、私でも手足のように使っているくらいで、また話を聞いて文字にしてくれるものまで実用化しています。そうは言っても自律型ロボットにお目にかかれるのは、私の生きているうちには無理でしょうかね。

ロボットに心を持たせることは単に私の興味でお話しているのではなく、ロボットの機能が高度になり活動範囲が広がるにつれて、自然にその必要性が生まれてくると思えるからです。たとえば、自分自身を護れるように作っておかないと、簡単に他人に盗まれたり壊されたりするという問題とか、一つの作業を達成していくのに、他のロボットと喧嘩したり他の人間と問題が起こったりする、それをどう解決するかという課題が出て来ることは目に見えています。ロボットにどのような自我を持たせるかという課題から、さらにどのような煩惱を組み込むのかという課題まで、「自律型」を作るとき真っ先に出てくる切実な問題になるはずです。もともと、「煩惱を持たせるのは危険だ」というのであれば、「覚りを開いた仏様のようなのにすればどうか……いや、それでは人間と付き合うのにうまくいかないかも……」なども考えなければならず、想像するだけでもわくわくしますが、そうじゃありませんか（笑）。



いずれにしてもこうなると、煩惱とか自我というものが一挙に科学に携わる方々の日常的な課題になるという、まことに興味深いことだと思っておりますが……。

自律型ロボット＝自分で立つて歩くだけではなくて、自律、すなわち他からの支配や助力を受けず、自分の立てた規律に従って正しく行動することのできるロボットのこと。

宗教のイメージと科学との関連

先を急ぎますが、次に我が国での宗教に対する一般的なイメージと科学との関連、ということを考えてみましょう。

神社と言えはご祈禱きとらう（お祈り）——商売繁盛とか安産の祈願とかその他いろいろあります——というのがイメージではないかと思えます。

また、お寺といえは葬式とか法事。すぐそういうところへ意識がまいります。私のこの格好はですね、お葬式にも着て行けますし、結婚式もこれでよ

ろしいんです。明後日甥が結婚しますけど、これで行くことになっています。葬式・法事というのは先祖供養ということでしょうね。そういうイメージが大体持たれているようです。しかし、仏教寺院でも同様のお祈りをされるどころがあります。商売繁盛しますよとか、家内安全。それからこないだ、すごいがありました。「心願成就」というのがありましてね。心の願いが実現する、何でも願ったことが実現できるという、そういうお寺がありました。

このように神仏にお祈りをして、それを叶えてもらう——神仏のお力によって幸せを得る——のを「現世利益」と言います。「私」の救済ではなく、客観的にも捉えることができる——外からも見える——利益ですね。リヤクなんです。ガリエキと読んだほうが内容と一致するかも知れません。

これは仏教というならば、覚りであるとか、救いであるとか、そういう仏教本来の道にたどり着くための入口——本線に繋がるための支線——というだけの意味しかありません。これを方便と言います。方便というのは、手だ

て、手段です。仏、菩薩が私たちを仏の教えに導き入れるための手だてです。この現世利益で求めているものと科学が求めるものは、わりと共通点があります。たとえば病気を治すということ为例に取ってみると、お医者さんに病気を治してもらうのと——これは科学的な治療です——、それを拒否してお祈りによって神仏に治してもらうのは、明らかに重なっています。

科学というのは、始めから救いとか覚りとかいうことは問題にする必要はないのですからそれでよろしいわけですが、宗教と銘打つ以上、病気を治すことのみを終始するのではなく、心の救いのほうへ誘う必要があると思います。宗教が宗教であるためには、さっきからお話している「私」をどうするか、解決をしてくれるものでなければならぬはずですよ。

時々、科学と宗教が衝突するとか、相容れないとか、と言われることがあります。それは「方便」の部分と本体と見てしまって、宗教の本質を見忘れているからです。両者の役割が違うのだから衝突するはずはないのです。

現世の利益っていうのは一つの入口、宗教の顔とでもいいましょうか、このごろよく使う言葉では、インターフェイスであると考えていただくか、いいと思います。

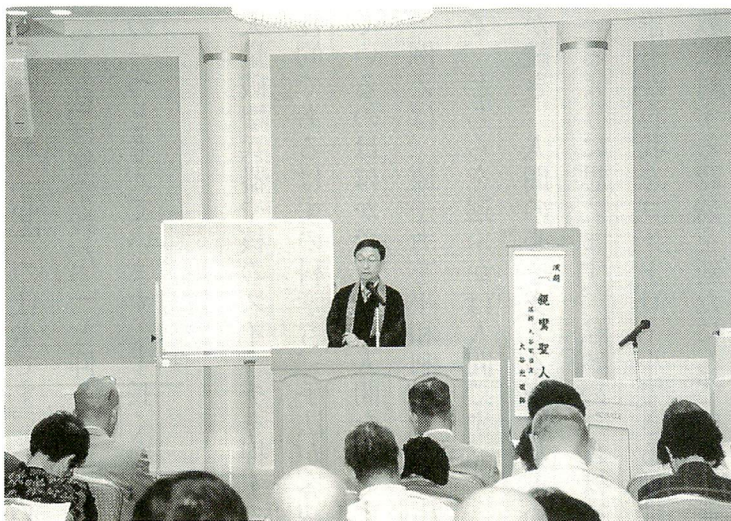
ただ、現世的な幸福を求めるというのは確かにこれ人情であって、それをいけないということは申せませんが、そこで終わりにしてしまうと、却って欲望を膨らしてしまっただけ悪いことをしたことになる、いらんことをしたことになるのであって、「肝心なのはその先である」ということです。

因みに申しておきますが、私どもの浄土真宗では、今お話してきたような現世利益のお祈りは一切いたしません。祈りたい気持ちやバネにして信心を深めることに専念せよと教えます。また、浄土真宗独自の「現世利益」——これは「私」に対するご利益です——というのがありますが、またの機会に譲りたいと思います（『みめぐみの』第十四部参照）。

まとめ

私たちは、判断・決断の連続の毎日を送っています。

朝起きるとき、「もうちょっと寝ていたいけど、起きようか。」
「ああ、歯を磨かなければ……」
などの小さな決断から、仕事上の将来を大きく左右する重要な決断とか、時には結論が出せず悩み抜いた末、「鉛筆でも倒して決めようか。」などととんでもないことを考えたりと、判断・決断を積み



臨済宗・薪流会での講演（6月11日、名古屋）

重ねながら生きています。これすべて私たちの「心」の仕事です。その心を育て支えているものが宗教です。「いや、私は無宗教だ。」と仰る方もあるかも知れませんが、私は無宗教も宗教の一つと考えています——長くなるので今日はお話ししません。

凶悪事件はもとより、最近問題の大量破壊兵器や核のスイッチを押すのは、他でもない心の仕事です。客観的理性的であるはずの科学も、手法が客観的理性的なのであって、そこに携わっているのはほかでもない人間なのです。何を作るかは人間の決めることです。例えば、原子力を平和利用した発電も爆弾を作るのも両方とも科学の仕事で、どちらを選ぶかは人間です。

ここしばらく科学技術優先の風潮が続き、人間の心を支える宗教を求めることとのバランスがまったく崩れているように思えます。私始めこれは宗教家の怠慢ですが、科学者も政治家も誰もが自我をコントロールできる理性を持つ努力をしていただくように、宗教に対する認識を新たにしていきたい

い、というふうに考えます。

ここで一応の締めくくりとさせていただきます（拍手）。

司 会 どうもありがとうございました。折角の機会ですから、ご質問など…… はい、どうぞ。

質問1 たいへん興味深いお話、ありがとうございます。お話を聞いて気がついたんですけども、先ほど「覚りを開く」というお話あったんですが、開くというんですね、我々、逆に閉じてる、閉じた状態があつてそれを開くという意味かなと。その辺、お教え願いたいと思います。

筆 者 何で「開く」と言うのでしょうか。何の気なしに使っている言葉なので、改めて尋ねられると戸惑います。

正確な語源は存じませんが、煩惱の根源が「無明^{むみやう}」^{むみやう}といって真理に暗いこ

とで、覚りというのはこの暗闇が晴れることです。暗いトンネルから出てきてぱっと明るくなるイメージ、暗闇を切り開くイメージと考えれば如何でしょうか。

質問2 うちの大学では工学部でも来年度から倫理を教えなきゃいけないということが決まって、私も一時間だけ「情報と倫理」っていうんですけども講義を持ちます。倫理と宗教との関係をどういうふうに考えたらいいんでしょうか。

筆者 言葉の正確な定義を存じませんので、私自身の私見というか、感じとしてしか申し上げられませんが、倫理というと何か、これをしてはいけない、あれをしてはいけない、こういうことをしなさいという、一つのお手本を示して、型にはめていくようなイメージがあって、言葉そのものがあまり好きじゃなくなつて申し訳ありません。で、宗教っていうのは外からじゃなく

て、もっと体の中のほうからですね、自分自身で掘り下げて行って、自分で道を見つけていくような、そういう違いがあるんじゃないかと思いますが……。

質問3 私、浄土真宗ですね、もう十数年間、年に二回はお寺で法話を聞いているんですけども。今、聞いている人の年代が六十、七十で、私なんかまだ若いほうなんです。やっぱりお寺というのは、どうも閉鎖社会に陥っているんじゃないかと思うんです。まあ新聞（機関紙）とかを配られることもあるんですけども。やはりこれから大学でもそういう倫理の話もあるようですけれども。心の布教とか、どういうふうに、本山のほうでは、考えられてるのか教えていただければ……。

筆者 お寺というと、やはり特別の場所と考えられて、何か入りにくいっていうか、敷居が高いっていうか、近づきにくいものがあって、お寺でお話

をしてても三人くらいしか来てもらえないけれども、喫茶店に行ってお話すると三十人も来てもらえるとかですね、そういう違いがいろいろあるように思います。私自身としてはできるだけ、どこからお呼びいただいても出かけていくことが大事だと思つてますし、それを積み重ねるしかないんじゃないかな。でまあ、こうやってあちらこちらでお話をさせていただくと、私にしたお話よりも、質問とか皆さんの表情とかで、却つていただくもののが多くて、本当に申し訳ないと思います。やっぱりどこへでもそうやって出かけていけないことには駄目だと、基本的には思つてます。あまり積極的なお答えにはなつてないかもしれませんが……。

質問 4 今、宗教と科学という形でお話しいただいたんですけども。我々（科学者）が、人間世界にとつていいと思つて、やったことが結果的にマイナスの部分も大きいものが出てきてる。例えばPCB（ポリ塩化ビフェニール

ル)なんて、大手なら「カネミ油症事件」になって出たり、後で何年かしてからわかるという形が多いですわね。そこで宗教家が事前に警告を発するという「百年の計」というのをやっていただけなものかと。我々——現実に動いている者たち——は前へ進むのに必死で大勢を見失いがちになる。別の見地から、百年の計を立てるシンクタンクに宗教家の方になっていただかなきゃいけないんじゃないかと思ってるんです。閉鎖的になって自分達の世界だけで動いて、世の中にいい部分を発信されてないんじゃないかと感じるんですけど、是非今日のようなお話をもっとしてっていただきたいと思っております。

司 会 非常に有難い、結びの言葉を言っていたいただきました(笑)。今日は先ほどの話の中で、人間は宗教と科学の両方を必要としている、両方がバランスよく整ってこそというお話がありましたけども、今人間中心的なもの考え方の中に、科学とか或いは倫理もそうですけども、宗教感というふうな

ものがバランスが取れるということが大事なんだなと思いつながら、先ほどのお話からずっと聞かせていただきました。

今日はこういった非常に高い次元でのものの考え方をさせていただける機会を作っていたくださりまして、どうもありがとうございます（拍手）。



読者の頁

感想 意見

神奈川県相模原市 山本 誠子さん

『みめぐみの』のご本には必ず心を打つ忘れ得ぬ言葉があります。「その部分をノートに書き残して、言葉に出してみる」ことを実行して心が癒され豊かにやさしくなりますのでありがたいことです。

東京都町田市 諸戸 貞昭さん

『みめぐみの』の第十八部二十五頁に「何か考え事をするときにでも心の中でお念仏を称えるようにすることで、…物事の見通しが良くなるはずです。」とあります。ツアーのプランにしてもよりよいものに気づかせていただき、「お念仏に育てられている」ことが実感できます。深謝。

いつもありがとうございます。あまり関心がなく読まずにいましたが主人も亡くなりまして一年が経ち今日手に取って読ませて頂きました。全部が私の心に入りませんが少しでも本当にそう思っ読みました。主人がいたらない私にたいして四十年間毎年感謝状を書いてくれました宝を残してくれ、また『みめぐみの』を讀み心に残るものを頂戴してありがとうございます。

富山県福野町 河合 寛さん

南無阿弥陀仏と称える習慣をつけることは、聞法と共に実行することにより信心はいただけます。私は長い間信心をもらいたいといろいろと読書をしたり話をきいたりしました。その結果どうにもならない自己自身に苦しみ、こんな私をこそ救わねばおかぬとのご本願とお聞きして苦しまぎれのお念仏を称えだしたのがきっかけで現在はずらすらと称名ができて心の平安を得ています。合掌

あとがき

みめぐみの刊行委員会

今回は「科学と宗教」について講演されたものの内容となっております。「科学」と聞いただけでアレルギー反応を起こす方もあるかも知れませんが、光道台下は「科学は生活を豊かにするもの。宗教は心を豊かにするもの。共に人を豊かにするものとして共通する」と仰っています。

常に科学の発達にも心を配りながら：生活する必要もないのですが、知らず知らずのうちに生活を豊かにする科学（便利さの追究）に求めるのと同じ発想に陥ってしまつて、宗教でもその入口（利益）ばかりに心を奪われて本来の「心の救い」を忘れていないかを、つかんで頂きたいと思います。

また、「小さな決断から大きな決断、これらすべてを“心”が判断します。その心を育て支えるのが宗教です。」との光道台下のお言葉を肝に銘じたいものです。

講演後の質疑応答の中に、「覚りを開く」というと私たちは「閉じている」のですか？との質問がありました。大変興味深い視点だと思えますが、皆さんも日頃感じられた素朴な疑問などをお寄せ下さい。

みめぐみの 第19部

2003年7月5日 印刷
2003年7月10日 発行

定価 200円

著 者 大 谷 光 道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒600 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754
-8167 本願寺寺務所内

TEL. 075(351)3555 FAX. 075(351)3120
振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株) 中 外 日 報 社



みめじみの刊行委員会刊